

しんぱん
しどうようもんしゆう
新版 指導要文集

だいよんしゆう

ぶつぽう

しやかい

第四章 仏法と社会

しゆつさん

出産

ほうとう

ほうじようせかい

ゆげん

ほうじよう

この「宝塔」は宝浄世界より涌現するなり。その宝浄

せかい ほとけ

じそう ぎ

お

世界の仏とは、事相の義をばしばらくこれを置く、

しようどう

かんじん

とき

はは

たいたい

ゆえ

ふぼ

ほうとう

証道・観心の時は母の胎内これなり。故に、父母は宝塔

ぞうさく

ばんしよう

造作の番匠なり。

ほうとう

われ

ごりん

ごだい

たきたい

宝塔とは、我らが五輪・五大なり。しかるに、託胎の

たい

ほうじようせかい

い

ゆえ

しゅつたい

ゆげん

胎を宝浄世界と云う。故に、出胎するところを「涌現」

い

しゅじよう

ゆげん

じりん

しゅつげん

と云うなり。およそ衆生の涌現は地輪より出現するな

ゆえ

じゅうじゆじゆつ

ち

ゆじゆつ

い

り。故に「従地涌出（地より涌出す）」と云うなり。

みようほう

ほうじようせかい

じっかい

しゅじよう

たいたい

みな

妙法の宝浄世界なれば、十界の衆生の胎内は皆こ

ほうじようせかい

れんげ ほうじよう

じっかい たいない

れ宝浄世界なり。蓮華の宝浄なれば、十界の胎内ことごと

むくしようじよう

せかい

みようほう

じりん

じっかい

とく無垢清浄の世界なり。妙法の地輪なれば、十界に

わた

れんげ

ち

しようじようじ

みようほう

ほうじよう

亘るなり。蓮華の地なれば、清浄地なり。妙法の宝浄

われ

しんたい

しようじよう

ほうとう

みようほうれんげ

なれば、我らが身体は清浄の宝塔なり。妙法蓮華の

ゆじゆつ

じっかい

しゆつたい

さんもん

ほんらいしようじよう

ほうとう

涌出なれば、十界の出胎の産門、本来清浄の宝塔な

り。

095 御義口伝

おんぎくでん

しゆっさん
出産
1110 ページ 8 行

ふうふとも ほつけ じしゃ

ほけきようる ふ

なかんずく夫婦共に法華の持者なり。法華経流布あるべき

種 継

たま こい う

おぼ

たねをつぐところの玉の子出で生まれん。めでたく覚え

そうろう

しきしんにほう

ひと

遅

そうろう

候ぞ。色心二法をつぐ人なり。いかでかおそなわり候

疾

生

そうら

くすり

飲

べき。とくとくこそうまれ候わんずれ。この薬をのませ

たま

うたが

給わば、疑いなかるべきなり。

やみ

ともしびい

あき

じよくすい

つきい

闇なれども 灯入りぬれば明らかなり。濁水にも月入

澄

あき

にちがつ

過

きよ

りぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。浄き

れんげ

ほけきよう

にちがつ

れんげ

こと、蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり。

ゆえ

みようほうれんげきよう

な

にちれん

にちがつ

れんげ

故に妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華とのごと

しんじん みず

りしよう

つき

かなら

おう

た

くなり。信心の水すまば、利生の月、必ず応を垂れ、

しゅご

たも

疾

生

そうろう

ほげきよう

い

守護し給うべし。とくとくうまれ候べし。法華経に云わ

みようほう

い

あんらく

ふくし

く「かくのごとき妙法」。また云わく「安楽にして福子を

う

うんぬん

産まん」云々。

くでんそうじよう

べんごう

もう

含

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて

そうろう

すなわ

によらい

つか

かえ

がえ

しんじんそうろう

候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べ

し。

(189 四条金吾女房御書

しじようきんごのにようぼうごしよ

しゅっさん

出産 1510 ページー8 行

しんじや

がたふうふ

ほけきよう

じゆじ

信者のなかでも、ときにあなた方夫婦はともに法華經を受持して

ふたり

あいだ

ほけきよう

るふ

たね

つ

います。したがって、お二人の間には法華經が流布していく種を継

たま

こ

う

ぐところの玉のようなお子さんが生まれることでしょう。まことにめ

ほけきよう

じしや

がた

ふたり

しきしん

にほう

でたいことです。法華經の持者であるあなた方お二人の色心の二法

せいめい

つ

ひと

しゆつさん

おく

なんざん

い

(生命)を継ぐ人です。どうして出産が遅れたり(難産の意)す

ちゆうりやく

しんじん

みず

す

ることがあります。か。(中略)信心という水が澄むならば、

りしよう

つき

ひと

りやく

まちが

利生の月(人びとを利益することは間違いないのです。したがっ

あんざん

ほけきようほうべんぼん

か

ごと

て、かならず安産されるでしょう。法華經方便品には「是くの如き

みようほう

ほつしくどくほん

あんらく

ふくし

う

妙法」とあり、また法師功德品には「安樂にして福子を産まん」と

と ふ こころがま

説かれています。符をいただく心構えについては、この弁公

にっしょう くわ もう べんこう によらい

(日昭)に詳しく申しふくめてあります。すなわち弁公は如来の

つか しんじん お

使いです。くれぐれも信心を起こしていきなさい。

いま つきまろごぜん
今の月満御前は、
うまれ給たまいてうぶごえ産 声に南無妙法蓮華經
と唱となえ給たもうか。

（
190 月満御前御書
つきまろごぜんごしよ

しゅっさん
出産
1512 ページ 9 行

さだ じゅうらせつによ よ あ 産 みず 撫 やしな たも
定めて十羅刹女は寄り合つてうぶ水をなで養い給うら
ん。あらめでたや、あらめでたや。御悦び推量申し
候。 そうろう

（190 月満御前御書 つきまろごぜんごしよ

しゅっさん
出産 1512 ページ 12 行

はは ごおんわす

たいない

ここのつき

あいだ

それにつきてても、母の御恩忘れがたし。胎内に九月の間

くる

はら

つづみ

張

くび

はり

下

の苦しみ、腹は鼓をはれるがごとく、頸は針をさげたる

いき

い

ほか

い

いろ

か

がごとし。気は出ずるより外に入ることなく、色は枯れた

くさ

ふ

はら

裂

ざ

ごたい

安

る草のごとし。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やす

うむ

すで

ちか

こし

破

からず。かくのごとくして産も既に近づきて、腰はやぶれ

切

まなこ

抜

てん

のぼ

覚

てきれぬべく、眼はぬけて天に昇るかとおぼゆ。かかる

かたき

産

お

だいち

踏

付

はら

割

敵をうみ落としなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて

す

わ

く

しの

いそ

抱

捨つべきぞかし。さはなくして、我が苦を忍んで急ぎいだ

上

ち

舐

ふじよう

濯

むね

搔

付

いだ

きあげて血をねぶり、不浄をすすぎて胸にかきつけ、懐き

抱 さんかねん あいだおんごん やしな はは ちち 飲

かかえて三箇年が間慇懃に養う。母の乳をのむこと、

いっぴやくはちじゅうこくさんしやうごころう ちち 価 いちごう

一百八十斛三升五合なり。この乳のあたいは、一合なり

さんぜんだいせんせかい 替 ちちいっしやう

とも三千大千世界にかえぬべし。されば、乳一升のあた

かんが そうら こめ あ いちまんいっせんはっぴやくごじゆうこく

いを撿えて候えば、米に当つれば一万一千八百五十斛

ごしやう いね にまんいっせんしちひやくそく あま ぬの さんぜん

五升、稻には二万一千七百束に余り、布には三千

さんびやくしちじゆうたん いっぴやくはちじゆうこく

三百七十段なり。いかにいわんや、一百八十斛

さんしやうじゅうじゆう

三升五合のあたいをや。

401 ぎやうぶのさなもんじやうのにようぼうへんじ 刑部左衛門尉女房御返事

しゅつさん 出産 2072 ページー12行

おや こ まも すがた

はは おん わす

これら（親が子を守る姿）をみるにつけても、母の恩は忘れが

こ たいない きゆう げつ あいだ ははおや くる

たいものです。子が胎内にいる九か月の間の母親の苦しきとい

はら つづみ くび はり

うものは、腹は鼓をはったようであり、頸は針をさげたようなもの

こきゆう いっぽう す かおいろ わる か くさ

です。呼吸ははく一方で吸いこめず、顔色は悪く、枯れ草のように

はら さ おも すわ からだじゆう

なつてしまいます。ふせれば腹が裂けそうに思われ、座れば体中

くる くる さん ちか いた

が苦しくなります。このようにして、お産が近づけば、あまりの痛

こし やぶ き め てん のぼ

さに腰は破れて切れてしまいそうであり、眼はぬけて天に昇るか

おも くる め かたき う お

思われます。このような苦しき目にあわせる敵を産み落としたなら

だいち はら す

ば大地にふみつけ、腹をさいて捨ててもかまわないであろうに、そう

はせずに、自分の苦しみを忍んで、急いで抱きあげて、血をぬぐいと

あら

むね

だ

さん ねん

り、きたないものを洗いおとし、胸にかきあげ抱きかかえて三か年

あいだこころ

そだ

あいだ

こ

はは

ちち

の

の間 心をこめて育てるのです。その間に、子が母の乳を飲む

りよう ひやくはちじゅうこくさんしょうごころ

ちち

あた

量は百八十石三升五合あまりになります。この乳の値はた

いちごう

ぜんせかい

あた

きちよう

とえ一合といえども全世界にも値するほど貴重なものです。そこで

ちちいっしょう あた

こめ

あ

いちまん

乳一升の値をかんがえてみるならば、米に当てはめれば一万

いっせんはつびやくごじゅうこくごしょう

いね

にまんいっせんななひやくたば

おお

一千八百五十石五升、稲ならば二万一千七百束よりも多く、

ぬの さんぜんさんびやくななじゅうだん

ひやくはちじゅうこく

布ならば三千三百七十段となります。まして百八十石

さんしょうごころ

あた

ぼうだい

三升五合の値はあまりに膨大なものなのです。